



多様性…未来を生き抜くために

校長 神田 朋恵

20歳になった教え子から年賀状が届きました。「お元気ですか。去年、大学でMOSと秘書検定の資格をとりました。またどこかでお会いできる日を楽しみにしています。」(MOSとはマイクロソフト オフィス スペシャリストの略で、PCの操作スキルを証明する国際資格) 小学3年生の時に担任していた子で、当時は保護者の方ともよく連絡を取り合っていました。他のお子さんと同じように、様々な悩みや課題を抱えながらも、自分に合った高校を選択し、自己肯定感を育み、高め、大学に進学。資格を取得し、未来に向かって前向きに歩んでいる姿に、私の方が元気と勇気をもらいました。

先日、花まる学習会の代表である高濱正伸氏の講演『これからの時代の子育て～AI時代に、学力を超える大切な力とは～』を拝聴しました。同会は【メシが食える大人・魅力的な人】を育てることを目標にしています。「基盤となる学力」の上に、「思考力」や「やるべきことをやる力」、「大好きなことに没頭し極めていく力」があるけれど、最も大切なのは、その土台にある「心」、すなわち「意欲、主体性、自己決定力」であるとのことでした。幼い頃から選ばせる、決めさせることの大切さを話していました。また、10歳を境に、

その前後の年齢によって子どもの特性が違ってくるから、大人が接し方を変える必要があるとおっしゃっていました。⇒

【子どもの成長の芽をつんでしまう落とし穴】

- 1 「過剰な先取り学習」で親が安心してしまう
- 2 あれやこれや、すぐに親が介入してしまう
- 3 子どもと大人の違いをわからず接してしまう

この話は、私が大切に考えている「認知能力・非認知能力の育成」と通じるものがありました。学習指導要領でも、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」と3つの力をバランスよく育むことが示されています。本校では、子どもが「何を学ぶか」だけでなく「どのように学ぶか」も重視して授業改善に取り組んでいますが、自ら学び方を選択する経験が、学ぶ意欲に結びつくことを確信しました。今後も、楽しくワクワクする授業創りを推進してまいります。

社会がどれほど変化し、先行きが予測困難な時代になっても、子どもたちには自ら課題を見付け、学び、考え、判断して行動し、自分なりの幸せを実現してほしいと願っています。一方で、現在、不登校の児童生徒数は35万人を超え、主な要因として生活リズムの乱れ、学校生活への不適応(やる気が出ない、不安)、教師との関係性などが指摘されています。本校の学校評価保護者アンケートに「ハンディがある子どもにも達成感が得られるような関わりや声掛けをお願いしたいです。」という御意見がありました。これは、ハンディの有無に関わらず、「一人ひとりに合った関わりや声掛け」を求めていると受け止めています。授業において「個別最適化」が求められる中、私達は努力を重ねていますが、学習面だけでなく、その子を丸ごと見取り、支援することを大切にしていきます。

別の教え子から、次のような年賀状も届きました。「昨年、司法試験に合格し、来年度から弁護士として働くことになりました。これも、**学ぶことの楽しさ**を教えてくださった先生のおかげだと、今でも感謝しております。今後は**社会に貢献できる人になれるよう**、努めて参ります。」

子どもたちの未来に幸あれ！ 保護者・地域の皆様、今月もよろしくお願ひいたします。